

『イエスの言葉とその思い』 ヨハネ11:7-16

11:7 それから弟子たちに、「もう一度ユダヤに行こう」と言われた。

11:8 弟子たちは言った、「先生、ユダヤ人らが、さきほどもあなたを石で殺そうとしていたのに、またそこに行かれるのですか」。

11:9 イエスは答えられた、「一日には十二時間あるではないか。昼間あるけば、人はつまずくことはない。この世の光を見ているからである。

11:10 しかし、夜あるけば、つまずく。その人のうちに、光がないからである」。

11:11 そう言われたが、それからまた、彼らに言われた、「わたしたちの友ラザロが眠っている。わたしは彼を起しに行く」。

11:12 すると弟子たちは言った、「主よ、眠っているのでしたら、助かるでしょう」。

11:13 イエスはラザロが死んだことを言われたのであるが、弟子たちは、眠って休んでいることをさして言われたのだと思った。

11:14 するとイエスは、あからさまに彼らに言われた、「ラザロは死んだのだ。

11:15 そして、わたしがそこにいあわせなかったことを、あなたがたのために喜ぶ。それは、あなたがたが信じるようになるためである。では、彼のところに行こう」。

11:16 するとデドモと呼ばれているトマスが、仲間の弟子たちに言った、「わたしたちも行って、先生と一緒に死のうではないか」。

○序論

このヨハネによる福音書では、各所でイエスさまとそこで登場する人との、ある意味「ちぐはぐ」にも聞こえるような会話の様子が記されています。

2章のカナでの婚礼での母マリヤとの対話。3章のユダヤ人の教師ニコデモとの対話。4章の井戸のそばでのサマリヤの女性との対話。・・・などなど。

その対話は、ときには困惑や”？”マークをもたらしたり、時にはその癒しや奇蹟につながることもありました。

気づくとこのイエスさまへの信頼へと開かれていく、ゆっくりと又は速やかに…。

わたしはそういうところを繰り返し見ていて思うことがあります。

① イエスさまが語ることで、困惑することはあたりまえかもしれない。

それを聞いて霊的に十分ではない自分に気づくことから始められます。

② それでもいいんだ、ということです。

その困惑からはじまるイエスさま体験があるということです。

③ イエスさまの知恵となさることは、わたしたちの思いをはるかに超えていて最善だということです。

イザヤ55:9（新共同訳）にはこうあります。これが結論でしょう。

天が地を高く超えているように わたしの道は、あなたたちの道を わたしの思いはあなたたちの思いを、高く超えている。

●本論

I. 光がある歩みを語る

11:7 それから弟子たちに、「もう一度ユダヤに行こう」と言われた。
これは、ここで最初に弟子たちを困惑させたイエスさまの言葉でした。

11:8 弟子たちは言った、「先生、ユダヤ人らが、さきほどもあなたを石で殺そうとしていたのに、またそこに行かれるのですか」。

それは10章の18節以降でも、石で打ち殺そうとすユダヤ人たちから逃れてきた。あれから日は経ってはいません。 そんな彼らにイエスさまはこう答えました。

:9 イエスは答えられた、「一日には十二時間あるではないか。昼間あるけば、人はつまずくことはない。この世の光を見ているからである。

:10 しかし、夜あるけば、つまずく。その人のうちに、光がないからである」。イエスさまはご自分の地上での歩みの時が限られていること、またあの十字架の時が迫っていることを意識していました。

その上で、今はまだ時間がある。恐れて動かないのではなく、今は光の時、動くべき時であることを告げています。

イエスさまは9章のあの生まれつき盲人の癒しの時にもこう言われたいました。

9:4-5 「わたしたちは、わたしをつかわされたかたのわざを、昼の間にしなければならない。夜が来る。すると、だれも働けなくなる。わたしは、この世にいる間は、世の光である」

イエスさまははっきりと、今、陽のある間に働くことの大切さを語りました。そして「だれも働けなくなる夜が来る」現実も語ったのです。

そして生まれつきの盲人の癒しです。すばらしい喜び出来事です。けれども、闇と闇の思いはそれに敵意を示し、イエスさまを石で打ち殺そうとしたのです。

そしてこの11章ではイエスさまが動き、ラザロのもとでラザロを生き返らせたとき、あの闇のユダヤ人たちの殺意は決定的なものとなります。

ヨハネ11:53 彼らはこの日からイエスを殺そうと相談した。

イエスさまが「もう一度、ユダヤに行こう」とう、そのときその決断を、いやいやおかしいでしょう？というのが弟子たちの反応でした。

そこにも、いわゆる対話の”ちぐはぐ”がありました。

けれどもイエスさまの、思いは、「昼の間に」今動くべきという、神さまのなさる時を意識して動いていたのです。

その背景に、祈りがあったことは言うまでもありません。

いまわたしたちが、生かされているこの時、福音を語るすることができる幸いな時であることを覚えて、祈りつつ家族に、そしてともに証しすることができれば感謝です。

Ⅱ. ラザロの死を語る

11:11 そう言われたが、それからまた、彼らに言われた、「わたしたちの友ラザロが眠っている。わたしは彼を起しに行く」。

先週、何度も取り上げた言葉がありました。それは…

11:5 イエスは、マルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。

そのラザロのことを、今日イエスさまは「わたしたちの友ラザロ」と表現します。

愛しておられた。友だから。彼を起こしに行くと。

それに対しての弟子たちの理解と言葉とイエスさまのやり取りが続きます。

11:12 すると弟子たちは言った、「主よ、眠っているのですしたら、助かるでしょう」。

11:13 イエスはラザロが死んだことを言われたのであるが、弟子たちは、眠って休んでいることをさして言われたのだと思った。

11:14 するとイエスは、あからさまに彼らに言われた、「ラザロは死んだのだ。わたしたちのこの日本でも、「眠る」とあか「永眠」という言葉を使ったりして、死とという現実を穏やかな言葉で覆うような表現をすることがあります。

しかしここでは、そのように語られたイエスさまと弟子たちとの間のちぐはぐ感がそのまま記録されています。

おそらくその現場でいたこの福音書の記者ヨハネもまた、その中でイエスさまの言葉の真意をとらえきれていなかった一人だったのではないのでしょうか。

それをどう理解したらいいのか…、戸惑った思い出がここにあるとわかります。

ああ、ここでもイエスさまの言われていることがわからなかったな、受け入れきれなかったな…。そういう”ちぐはぐ”を経験した、それが弟子たちでした。

けれどもそれは悪いことではありません。

イエスさまと向き合って生きていくならば、わたしたちがただ絶望を抱く「死」というものと、対照的にそれを「起こそう」というイエスさまの言葉の不思議に理解が追い付かない…ことがあるからです。

それでもいい、そこからイエスさまについていくならば、そのみわざを経験できるので。

Ⅲ. ご自分がなさろうとすることを語る

11:15 そして、わたしがそこにいあわせなかったことを、あなたがたのために喜ぶ。それは、あなたがたが信じるようになるためである。では、彼のところに行こう」。

ラザロの病気であることの知らせを聞いたのはヨルダンの向こう側のことでした。

ラザロとマルタとマリヤが住まうユダヤ地方のベツサイダからは2日間ほどの距離があったようです。先日も申し上げたように、たといイエスさまがそれを聞いてすぐ立って出かけても間に合わなかったことがわかります。

その上でイエスさまは、弟子たちに向けてこう語ります。

「わたしがそこにいあわせなかったことを、あなたがたのために喜ぶ。それは、あなたがたが信じるようになるためである」と。

弟子たちが信じるようになるために、イエスさまはこの起きてしまった死の現実さえ、あなたがたのために喜ぶと言えたのです。

この後彼らが目撃することは、死人が生き返るという驚くべき奇跡でした。それはま

たのちに経験するイエスさまが十字架の死を超えて復活されるという圧倒的に驚くべき現実を、知ること、信じることへとつなげていただくようになるのです。ある意味、弟子たちにとっても、もしわたしがその場でいても、受け入れきれなかったような出来事がここで起こったのです。

さて、今日最後におよみしたトマスの反応は象徴的です。

11:16 するとデドモと呼ばれているトマスが、仲間の弟子たちに言った、「わたしたちも行って、先生と一緒に死のうではないか」。

これから起こることを知っている、わたしたちにはある意味滑稽に見えるようなトマスの言葉です。けれども彼は、大真面目でした。彼にとって、そして弟子たちにとって、これから向かうラザロのことよりも、殺意を向けて来るユダヤ人の問題の方が現実的に思えたからです。

ここにも、イエスさまと弟子たちの間に”ちぐはぐ”感があります。

聞いてもわからなかった…。わたしたちも同様だったかな…と思わされます。

そしてそれは恥ずべきことではない…とここでは申し上げておきましょう。

さいごに)

何度もイエスさまと対話する人たちの間の”ちぐはぐ感”ということを取り上げました。

それは、わかってないなあ「ダメな弟子たち」。わかっていないなあ、あの人たち、わかっていないなあ「ダメな自分」という風に、その対話で決め打ちして評価・断罪するために描かれているではありません。

そのすべてを覆って、言葉をかけて、時間をかけて成長させてくださるイエスさまの恵みが語られているのです。

ヨハネの福音書では、その多くの対話の”ちぐはぐ”の中で、イエスさまのなさる良い御業を経験し、そして本当の意味でイエスさまを信じて生きよう、信頼して生きようという風に導いてくださっているのです。

先週繰り返して「わたしはイエスさまに愛されています」と言葉に表しました。

もしかしたら、わたしたちの生きる周囲では「わたしは愛されています」という言葉自体が、耳なじみのない言葉ではないでしょうか。

耳なじみがないと、理解が追いつかない、わからない。受け入れきれないこともあります。だからこそ、聖書を通して、イエスさまがわたしたちをどれほど愛して下さっているかを、耳にし、心に留めそして自分の者としていただきたいのです。

聖書は、神さまがあなたを愛していると言ってくれるのです。

1ヨハネ4:10

わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。

この言葉をわたしたちの耳に、心に受け留めて生きる者とされたいですね。